時事新報は全國中紙面の最も廣き新聞紙なり
時事新報には每號詳細なる商況物價の報告あり

時事新報

第三千七百八十一號
明治廿六年十月八日　日曜日
舊曆癸巳八月廿九日（戊、寅）
日出午前五時四十三分　日入午後五時十四分　月出午前三時四十六分　月入午後四時三十二分　滿潮午前四時十分　午後四時三十四分
（西曆一千八百九十三年）

時事新報定價
時事新報は毎號八面乃至十二面にして詳細なる商況物價の報告あり其代價遞送料は左の如し
一號　貳錢五厘○一箇月　前金五拾錢○三箇月　前金壹圓四拾五錢○六箇月　前金貳圓八拾五錢○一箇年　前金五圓六拾錢○月曜日休刊（此他大祭祝日年始年末等一切休刊セズ）
●前金　一旦受取りたる前金は凡て通貨を以て返戻する事なく新聞紙代の前金は新聞紙を以て又廣告料の前金は廣告を以て勘定する事と御承知被下度候

時事新報遞送料
一　日本國內並に朝鮮國京城、仁川、釜山、元山津　一箇月　金拾三錢
二　南亞米利加、中央亞米利加、米國若くは加奈陀を經て郵送する歐洲各國　一箇月　金六拾錢
三　北米合衆國、英領加奈陀、布哇諸嶋　一箇月　金三拾錢
四　香港を經て郵送する亞細亞諸港、太平洋諸嶋、濠洲　一箇月　金六拾五錢
五　露領浦潮斯德、淸國諸港　一箇月　金三拾五錢

時事新報廣告料（前金）

一行五號活字廿四字詰	一日限	一日以上六日迄	七日以上
一行ニ付	十三錢	十一錢	十錢五厘

本社へ寄稿に付

東京府下を始め各府縣に通信社なるものありて是より各新聞社に報道を發送し各新聞社は之を受けて紙面を塡塞するより各社同一の記事を掲ぐるもの尠からず獨り時事新報社は社員並に通信員の多きを以て斯類の社に通信を依賴せずと雖も世間往々此事を知らずして通信社にさへ報道すれば本社にも其報道は達する事と信ずる方多きが如し爲めに行違ひを生じたる場合も尠からざれば本社に記事論說を寄稿せんとする方は直接に本社に向け發送あらんことを請ふ

時事新報社に達したる投書の原稿は凡て寄稿者に返戻せず又本社に保存せず

時事新報

我鐵道理事法の不行屆なる箇條は枚擧に遑あらず汽車速力の鈍きが如き最も堪へ難き所なれば過般以來每度本紙上にも論じて讀者に諮る折柄、米國發兌の雜紙を見れば左の一編あり彼國の汽車は既に一時間八十哩の速力に達して年々歲々唯進むの一方のみなるに我鐵道は其創設以來凡そ二十哩內外の定數に止まりて曾て改進の痕なし理事者は此事實を見ても尙は今日の現狀に安んずるを得るか我輩は唯その人の優長なるに驚くのみ

世界中最も速き列車

レールロードガゼット記者
ブラウト氏原文

記者は今年五月二十八日の午後三時に紐育を出發してシカゴに行き同三十日の午前十一時十五分に再び紐育に歸り來れり即ち余は四十四時十五分間に往復千九百二十八哩の路程を旅行したるのみならず其中四時間をシカゴに費して所用を便ずることを得たるものなり而して余が此旅行は全く商用の爲めにして決して奇を好み名を賣らんとするの心より試みたるものに非ず男女老若を問はず何人にても同樣の旅行を爲さんと欲する者は其目的を達するに聊かも困難を感ずることなかる可し余は右の旅行中常に執筆を以て時を消費し夜は最と穩に眠り三度の食事も車中にて靜に快く食することを得たり列車の進行は如何にも滑にして乘客は更に激動を感ずることなく唯時々窓外を眺め電柱哩程標などが非常の速力を以て後に疾走するを見て始めて我が乘れる車の進行如何に迅速なるかを知り得るのみ單に車の內部に目を注ぎたるのみにては一處に停車するものと殆んど區別することも能はざる程なり此列車は二十時間に紐育とシカゴとの間九百六十四哩を走るが故に其平均速力は一時間四十八哩十分の二に當るの割合なれども途中停車場に止まることも都て九回にして其內七回は機關車を附換へ列車の車輪を檢査する等の爲めに隨分長く停車するを以て是れ等の停車時間を差引くときは平均の速力更に大なるを知る可し余は試に列車の走ることも最も速なりと思はるゝ時に自から時計を以て之を計りしに二十五哩の線路を平均一時間七十哩の割合にて通り拔け且つ其內一哩をば僅に四十三秒（即ち一時間八十四哩の速力）にて走りたるを發見したり

抑も紐育中央鐵道會社と其聯續線なる湖岸鐵道會社とが此度び前記の如く紐育シカゴの兩市間に二十時間列車の往復を始めたるは鐵道世界に於ける近來の一大事件にして是れを以て單に鐵道會社の廣告手段など想像するは誠に皮相の判斷のみ千八百八十一年に紐育シカゴ間の列車時間が減縮せられて二十六時間と爲りたるときには尙ほ其上に强ひて一二時間を減ずるの必要はなかりしなり何となれば旅行の時間が二十四時にても又二十六時にても乘客は必ず一夜を汽車の中に費して翌一日は商賣を休まざる可らざればなり或は二十四時間なれば夕にシカゴを出發する乘客が翌日の同時刻に紐育に着して其晚の演劇を見物することを得る等の利益もなきに非ざれども普通商賣人の都合より云へば寧ろ每夕出發する廉價なる三十六時間の列車に乘り車中に二夜を費して翌々日の早朝先方に着する方經濟にして且便利なる可し然るに列車の時間減じて二十時となれば其結果大に異なるものあり此列車に乘る者は僅に三日の間に兩市間を往復して一日も仕事を休むの必要なし例へば紐育の商人が午後三時の列車にて出發すれば翌日午前十時にはシカゴに着す可し（紐育とシカゴとは經度の相違の爲め一時間の差あり）其れより四時間同市に滯在して業務を濟ませ午後二時發の列車に乘込むときは翌日の午前十一時十五分に紐育に着するを以て其日も亦休業するに及ばざる可し左れば此度の二十時間列車は全く商人の便利を謀りて設けたるものにして之を名づけて商人列車と云ふも可なり其商實社會に及ぼす利益の廣大なるは尋常人の容易に想像し能はざる所なり若しも今後此列車の時間を減縮して十八時間と爲すこともあらんには是れが爲めに商人社會の蒙る利益は尙ほ一層大なる可きは論を俟たず未來のことは容易に豫言す可らずと雖も余は今後二年を出でざる中に紐育シカゴ間に十八時間列車の往復するを見ることあるも決して驚くことなかる可し現に今日にても十九時間に兩市の間を旅行するは出來難きことに非ず即ち湖岸鐵道の汽車をして紐育中央鐵道と同じ速力を以て走らしむれば總線路の平均速力五十哩十分の六と爲り紐育とシカゴとの間を十九時間にて走ることを得る筈なり左れば二十時間列車の成績宜しき上は更に十九時間列車の往復を見ることも自然の順序なりと云ふ可し且つ又今後兩市間の汽車速力を增進せしむる大原因は即ちペンシルヴエニヤ鐵道の競爭なり同鐵道會社は曾て他に卒先して兩市間の列車時間を二十六時四十五分に減縮し次で又二十五時に改めたる程の次第なれば今日その競爭の大敵たる紐育中央鐵道にて二十時間列車を實行しつゝあるを知りながら空しく手を袖にして傍觀することは萬々ある可らず同會社にても必ず紐育中央鐵道と同じく遠からず二十時間列車を走らすることゝなる可く然る後は又遠からずして兩鐵道とも十九時間列車を設くるに至るは勢の當に然る可き所なりと云はざるを得ず十八時間列車に就ては余は何とも豫言すること能はずと雖も彼の大西洋を四日間にて渡航す可しと云ふプロフエツソル、バイルスの汽船出來上るまでには必ず紐育シカゴ間を十八時間に疾走する急行列車も出來ることならんと信じて疑はざる者なり

官報

○農商務省告示第十四號
白耳義國アンウエルス府萬國博覽會出品荷物運賃ハ往復共北獨逸ロイド會社ノ汽船ニテ定價三分ノ一ノ割引ナ爲ス旨其筋ヨリ通牒アリタリ
明治二十六年十月七日　農商務大臣伯爵後藤象二郎

雜報

○無紀律と不信任

朝鮮といふ國あり其官職は金錢によりて賣買せられ其官吏は賄賂によりて左右せらる唯金錢を見て職司を見ず唯賄賂ありて紀律なし腐敗混雜言語同斷にして其今日に至るまで百事なす所なく日々に衰亡を俟つ所以のものは主として官吏その職を盡さゞるが故なり人民も亦昏睡して慨然一大革新を企つる者もなく上下ともに積弊の極に達したるは洵に悲む可き次第にして吾々は唯餘所ながら比隣の不幸を弔するのみ何等の施設も何等の事業も斯る政府に對して信任附托す可きにあらず到底手の付け樣もある可らざるものなり蓋し此の如きは今日の世界に於て稀に見る所の事例なれども政府の紀律將た官吏の心事如何は國運の消長と如何に密接重大の關係あるやは徵し觀て思ひ半ばに過ぐるものあらん

我國古來の士風たる忠孝仁義を骨として廉耻を尙び名節を重んじ燦爛たる德光は扶桑日出の光に映じて是亦世界稀に見る所の事例なりしが維新後政府に奉仕して恰も昔時の士流の地位に立ちたる人々を見に固有の德義は敢て著るしく其光明を失したりと云ふに非ざれども世祿に代ふるに俸給を以てしたる尙武に代ふるに文
明を以てしたる
て醜聞怪談實に
と云ふ此等の交
るもの蓋し偶然
評言するを要せ
風の頹廢と云く
ふも或は免れ難
しは從來に於て
擊するに銳なる
多し故に民黨の
ある政府を造ら
なきなり紀律に
施設を附托せん
し且つ殆んど行
に時勢に感ずる
動もすれば呼ぶ
ん斯る政府に從
は妄信なること
ざるなり
官吏服務紀律は
政府に多少の過
て議會開設の以
しく監督す可し
り然りと雖も不
て之を監督する
吏之れを監督し
是れ我が服務紀
官に就て之を責
即ち國務大臣は
臣彈劾の權を附
督のみならず大
下と刑法の外よ
なり夫れ此の如
ふすること能は
なきにあらずや
必竟この慣行を
且つ夫れ醜聞怪
例へば彼の震災
を見よ議會が之
ん歟なれども當
の間然す可きな
肅なりと云ふを
として認むるを
も頃日改進新聞
名前も見ゆる樣
は得て斷定す可
とすれば政府は
か記臆す去年十
府は樞密顧問の
商云々の事件も
だしきや公判の
問する所ある可
要するに政府の
に比するに甚だ
せざる可し況ん
人取締の如き理
て常に緩慢に流